

# 乳幼児の「自己への信頼」を育てる保育

—環境構成の視点から—

椛 島 香 代\*

## Abstract

Ministry of Health, Labor and Welfare and the Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology say: Infants and children interact with their environment by themselves and grow up. So, it is important to analyze the educational environment. Further, we have to support the infants and children to develop their “self-confidence”. In my paper, “self-confidence” defines to settle emotion, to trust with competence for growing and interact with the environment. I would like to consider and analyze as a case study.

Case 1: Infants are in good spirits and health if the nursery school teachers take good care of their personal rhythm. If infants sleep, in a quiet and comfortable environment, they have confidence in the environment. Teachers have to take into consideration their situation and good circumstances.

Case 2: When mothers have reliance on teachers, these mothers assist their infants to develop in cooperation with the teachers. Teachers’ advise mothers on how to interact with infants, change their environment at home and day care. It is then that the infants become interested in their environment, change their behavior and develop their moving skills.

Teachers need to consider the educational environment-it includes their house-and support to the parents.

**Key Words**: early childhood education, educational environment, self-confidence

---

Day care to develop “self-confidence” in early childhood—From the educational environment—

\*Kayo Kabashima

Correspondence Address: Faculty of Human Studies, Bunkyo Gakuin University,  
1196 Kamekubo, Oimachi, Iruma-Gun, Saitama 356-8533,  
Japan.

Accepted October 27, 2004.

Published December 20, 2004.

## I. はじめに

幼稚園教育要領において、幼稚園教育の基本は「環境を通して行うもの<sup>(1)</sup>」であり、以下の三点を指導の際重視することが求められている。それらは、幼児の安定した情緒の下で主体的な活動を促し、幼児期にふさわしい生活が展開されること、自発的な活動としての遊びを通しての指導を中心とすること、幼児一人一人の特性に応じ、発達の課題に即した指導を行うようにすること、とまとめることができる。

また保育所保育指針では、「(略)子どもが健康、安全で情緒の安定した生活ができる環境を用意し、自己を十分に発揮しながら活動できるようにすることにより、健全な心身の発達を図ること<sup>(2)</sup>」を保育の基本としている。

いずれも、乳幼児の情緒の安定を基盤に、乳幼児自身が自ら環境にかかわり、自己を発揮していくことを基本としている。このことは、保育において、三点の課題を提供している。一点は、乳幼児の情緒の安定をいかに図るか、二点目は乳幼児が「自ら環境にかかわる」「主体的な活動」とは、いかなるものであり、そのために乳幼児の内面に何を育てなければならないのか、三点目は、前述の二点を配慮して、保育者が乳幼児にどのような環境を提供し、乳幼児を育てていくか、である。

本稿では、乳児保育事例を検討することによって、乳幼児が自ら環境にかかわり自らを育てていく力を育てる環境構成について考察したい。

## II. 保育環境分析の必要性

乳幼児期は、人間形成の上で大きな発達をする時期である。乳幼児は、情緒、運動、言語、社会、知的側面等において、基本的かつ最も必要な発達を遂げるといふ課題を負っている。乳幼児保育の意義は、これらの乳幼児の能力を一步一步確実に育てていくことにある。

前述したように、乳幼児には「環境にかかわって自らを育てていく」ことが期待されている。しかし、立場を変えて考えると大変高度な要求であると言える。自ら行動を起こし、その結果をとらえ、検討し、次の行動を生起したり、結果を自分を成長させる糧にしろという要求である。自分自身で自らの能力を育てることを期待されているのである。しかしながら、実はここで言う「環境」とは、乳幼児の身の回りに「自然」に存在するものではないのである。乳幼児は「用意された」環境にかかわって、自らを育てていくという前提がある。

乳幼児の能力を育成するために、保育者は最も重要な役割を果たさなければならない。保育者がこのことを意識せず、環境構成を吟味しなければ、乳幼児は、「マナー化された環境で同

じ遊びを同じように繰り返す」、あるいは「ぶらぶらと時間をつぶす」ことになりかねない。乳幼児がかかわる環境には、保育者が介在するのである。保育者が環境を創り、工夫し、自らも乳幼児にかかわることによって、乳幼児を育てるのである。保育者自身が、乳幼児の置かれている状況を的確にとらえ、問題意識を持って環境を考察しなければ、乳幼児を育てていくことは不可能である。

保育現場において、援助、指導など、乳幼児と直接かかわることについては関心も高く、また、研究も多く行われている。しかし、環境の側面からみると、物的環境の分析は行われても、環境の一部である保育者のあり方、乳幼児の環境との相互作用を読み取った上での環境の再構成などの側面にはあまり関心が払われていない。乳幼児保育は、「環境を通して行う」ことが基本である以上、保育者も保育環境の重要な要因であるという立場をとり、環境を創る保育者、環境を通して乳幼児にかかわる保育者、という点からの分析視点を持たなければならないと考える。

### Ⅲ. 保育における「自己への信頼」

環境にかかわることで、自らの能力を育む力、言い換えれば自己教育力が乳幼児の能力を培っていく。この自己教育力の根底をなすものは何か。それが「自己への信頼」であると考えた。安定した情緒の下、自分自身の存在を肯定でき、自分の持つ能力を信頼することである。自ら育つ能力を持つことを信頼することでもある。

乳幼児は、「愛されている」「大切にされている」という実感を持つことで、自己の存在を肯定する気持ち、つまり自己肯定感を育む。乳幼児の行動に対して、応答があるのみならず暖かいふれあいや肯定的な反応によって、満足感、心地よさを体験していく。この実感が乳幼児のひと、ものなどの周囲の環境への興味、関心を喚起し、かかわりを誘発する。外界とのかかわりを通して、人は様々なことを学習していくものであるから、乳幼児期の発達の特徴を考慮したとき、乳幼児に満足感、達成感、成就感、優越感等と言われる自己に対する肯定的感情を多く持つ経験をさせていくことが重要である。乳幼児が環境に対して積極的に働きかけるほど、環境から多くの応答を得られ、環境に対する理解が深まる。それだけ学習する機会が増えるのである。

そこで、乳幼児期の「自己への信頼」を本稿では以下のように定義したい。それは、「情緒的に安定し自分の能力を信頼し、環境に自ら働きかける力」である。保育において、保育者が幼児を理解し、導くためには乳幼児の行動を観察、分析、考察することが欠かせない。乳幼児が環境にどうかかわっているのかを見取ることも重要なのである。よって、ここではただ自らを信頼するだけでなく、環境に働きかける力も同時に検討することが必要であると考えた。実践事例を検討することで、乳幼児の「自己への信頼」を育てる保育のあり方を考察する。今回

は、0～2歳までの乳幼児の事例を取り上げ、低年齢児の保育のあり方を中心に検討する。

#### IV. 事例と考察

##### 事例1-1

児童厚生施設（K施設）における保育プログラムでの事例。母親が日にち、時間を柔軟に選び予約した上で利用するシステムになっている。

6ヶ月 女児（R）。

母親が非常勤の講師のため、週1回午後の時間帯に3時間預かる。

午後からの保育のため、入室するとすぐに眠くなる。母親に確かめると、いつもその時間帯に午睡をしているとのことであった。あまり分離不安は強くなく、母親から保育者の腕にスムーズに抱かれる。保育時間も3時間と比較的短いので、Rの生活リズムを優先し、しっかり午睡をとって、機嫌良く母親のお迎えを待てるよう配慮する。あまり遊具などを出しておかず、パーティーションで場を区切り落ち着いた場所を用意するなど、午睡のための雰囲気をつくって落ち着いた雰囲気の中で受け入れるようにする。

Rが入室すると、おむつ交換をし、衣服を整え、心地よく眠りに入れるように配慮する。保育者が抱き上げると、Rは保育者の顔をじっと見るので、保育者が「もう眠いかな。Rちゃん、遊んだ方がいい？ねんねする？」などと優しく声をかけ、床におろそうとすると声を上げたり、しがみついて抱っこを要求する。抱かれながら保育者の肩に頭をもたせかけたり、胸に顔を埋めながら次第に眠りにつく。このようにして寝付くと、約2時間たっぷり睡眠がとれ、寝起きもよく、その後のミルクもよく飲むことができた。

母親には、せっかく来室するのだから、保育室の様々な遊具などで遊んでほしいという気持ちもあったようだが、まだ月齢が小さいこと、週1回の利用でRのリズムがとりにくいことなどを話し、Rの保育室での過ごし方に理解を求める。このように過ごしていくことで、帰宅後の生活がスムーズにできることが母親もわかり、Rの生活を優先することの重要性を再認識した様子であった。

##### 〈考察〉

月齢が低いほど、乳児の生活パターンが多様で、個々に合わせた配慮が必要となる。Rは保育時間がちょうど午睡の時間帯にあたり、遊びや活動を工夫すると言うより、Rの生活リズムを優先することになった。保育にはこのような乳幼児の健康、生活の指導も必要である。基本的な生活習慣を獲得するために、保育者、周囲の大人が乳幼児の生活リズムを確立し、配慮することが欠かせない。

乳児の場合は、「機嫌良く過ごす」ことが、「健康である（病気をしていない）」ことと直結

していると言っても過言ではない。乳児の保育にかかわる大人は、まず、乳児の健康状態を把握し、健康でいられるための配慮を行わなければならない。日常生活をしっかりと把握し、できるだけ規則的な生活をしていくことで、乳児の生活リズムや、生活習慣を培っていくのである。生活時間や自分の健康状態に対する配慮をしてもらうことで乳児は「心地よさ（快）」の経験を積み重ね、周囲の大人への信頼感を育てていく。この場合には、「場所が変わっても日常生活リズムが維持できる」「眠いときに安心して眠ることができる」「抱っこしてほしいときにしてもらえる」「気持ちよい状態で眠りにつくことができる」といった配慮である。

また、保育環境にも様々な工夫が行われた。落ちていて眠りにつけるよう一部照明を落としてやや暗くする、優しい音楽を流す、小さな落ち着く空間に寝場所をつくるなど、物理的な環境構成に加え、シフトを調整し、同じ保育者が受け入れできるように配慮する、保育時間の過ごし方、受け入れ時の保育者の働きかけなどにも留意し、乳児の過ごす環境を広くとらえ、工夫するようにした。保育者は、物的環境のみならず、時間、雰囲気、保育者自身の受容的な雰囲気など、目にみえにくい、言語化しにくいものにも目を向け、検討する必要があるのである。

#### 事例 1 - 2

Rも初期の頃こそ保育室でただ「眠って」過ごしていたが、だんだん睡眠時間が短くなってくると、保育者が特別に配慮しなくても保育室で遊べるようになった。他の乳幼児と一緒に同じ遊具で遊んだり、同じものをみて喜んだり、保育者とのもののやりとりを繰り返し行ったり表情豊かに楽しんで過ごす姿がみられた。保育者との関係も良好で、不安になったり寂しくなると、保育者の方をみて泣いたり、膝によじ登ってきたりと自分から保育者とのかかわりを求め、思い通りにならないときには泣く、声を出すなど不快感を示すことができるようになった。

#### 〈考察〉

ここでは「眠りたい」乳児への配慮を中心に保育してきた。この場合、乳児は表層的にとらえると受動的な状態に見えるが、乳児自身は行動を起こさなくとも、環境から様々な情報をとらえ、環境への理解を構築していることがわかる。「眠りたい」乳児の欲求（状態）を理解され、暖かくかかわってもらい、安心して過ごす（眠る）ことができていたという事実は、乳児に母親以外の人と過ごす環境に対しての信頼感を育てていたと言える。そのため、その後の保育がスムーズに行うことができた。具体的には乳児が遊びに対して安定して取り組むことができ、保育者に対しての信頼感を持つことができたということである。安定して環境にかかわっており、「自己への信頼」の芽生えがみられる。乳児期にこそ特に、保育者は乳児が過ごす場所、時間、健康、生活の状態をきめ細かく理解し、乳児が満足して生活できるように働きかけることが必要である。乳児は自らの移動能力が未熟であるがために環境を自ら変えていく力も未熟なのである。保育者はそのことを十分に理解していないと、「乳児の保育はらく」「毎日同じことの繰り返し」などという誤った認識で保育することになる。乳児一人一人の要求や生活

乳幼児の「自己への信頼」を育てる保育（梶島香代）

リズム、成長の状態を読み取り、配慮することは、幼児以上に難しい。周囲のひと、ものなど環境に対しての信頼感、安定した情緒を育てるという重要な課題を負った乳児期の特性を保育者は十分理解し、保育環境を整備することが必要である。

#### 事例 2 - 1

10ヶ月 男児（B）。

K施設へ保育室一般開放の日に来室。身体の大ききの割に、母親がずっと抱いたままで遊んでいる。保育者が気になったので注意してみると、おむつ替えのときにもBがほとんど動くことなく、仰向けにじっと寝たままである。母親は他の母親ともほとんど話をせず我が子におもちゃをみせたり、一緒に遊んでいる。保育者と母親が視線が合ったことをきっかけにして、会話を試みる。来室したきっかけやおもちゃについての話題など差し障りのない内容の会話することで、母親は次第にリラックスして、保育室の環境について等積極的に話し始める。育児や保育に大変興味を持ち、多数の書籍などを読んで情報も多いことを窺わせる内容であった。この日は、一般開放の日程表や、K施設で行う様々な保育プログラムを紹介したパンフレットを渡し、また機会があったら来室するように声をかけ、子どものことについては特に話題にすることなく、帰宅する。

#### 〈考察〉

昨今では、子育てする保護者を支援することは保育者の重要な役割となってきた。「保育」と一言で言っても、様々な形態がある。保健センターにおける親子講座、子育て支援施設、保育所における一般開放、親子遊びなど保護者と子どもで利用する場が増えてきている。その中で、保育者がどのように親子にかかわっていくかについては課題が多いのが現状である。この事例のように、フリーで自由に利用する場合、保育者は親子に対して問題意識を持ったとしても、なかなかそれを追求することができないという状況が生まれる。また、利用する親子の側にも保育者からのかかわりを特に求めている場合も多く、保育者からの積極的なかかわりは「よけいな世話」にもなりかねない。幼稚園、保育所においても同様の問題は存在する。保育者と保護者の間に細くても継続的な関係を構築することから始める必要がある。乳幼児は、家庭での養育が基盤となり成長する。保育者は必要に応じて親子共々受け入れる環境を用意し、受け止める努力が必要である。

#### 事例 2 - 2

5日後、母親より電話が入る。このとき、別な保育者が電話に出るが、一般開放後の反省会で話題に出た親子であったことが特定できたため、来室時に対応した保育者に電話を代わる。渡したパンフレットの保育プログラムについての問い合わせであった。保育者が内容について丁寧に説明すると、興味はある様子であったが、参加してみたいという意志はみせない。会話

を引き延ばす必要も感じなかったので、保育者は「お子さんはお元気ですか」とさりげなく、問いかけた。母親は、あまり我が子のことは話題にしたくなさそうな反応であったので、それ以上は追求せずいつでも来室してかまわないことを話して電話を切った。

#### 〈考察〉

初めての来室後、電話をしてくるのであるから、母親が保育者と何らかの関係を持ちたい気持ちを持っていることは明らかである。しかし、保育者は母親の本心を追求することを避け、差し障りのない話題を通して母親を理解しようとしている。話題は保育プログラムのことであるが、やりとりを通して母親の性格や、子どもに対する気持ち、不安傾向、興味、関心の方向が理解できるからである。保育においては、「待つ」ことも重要な援助の一つである。母親の話を忍耐強く肯定的な反応を返しながらかきながら聞くことで、「あなたを受け入れる場がここにあるので、必要ならばいつでもおいで下さい」というメッセージを言葉や、話を聞く態度で示し、母親の情緒の安定や、保育者への信頼感を育てようとしている。母親が自己開示するまで、支えるつもりがあること、待つつもりがあることを間接的に表現している。

保育者の側にここで関係が切れるかもしれないという危惧があったことも確かである。しかし、詰問しても母親からは何も得られないことをやりとりの中で感じ取り、待つことを選んだ。時間も環境の一つである。保育者について理解する時間を相手に保障することで、相手がゆっくり行動することを認め、安心感を持たせる配慮をしたのである。

#### 事例 2-3

その後も、何度か母親から電話があり、そのたびに丁寧に応対するが、特別用があってかけているようでもない。言いたいことは別にあると確信が持てたので、「何かご心配なことがありますか」とはっきり質問した。すると、子どもが寝返りをしない、はいはいをしないのだ、と言う。このとき初めてはっきりと生年月日を問い合わせ、生後10ヶ月になることがわかる。医師や保健所ではどのように言われているか、また、どこかに相談したことがあるかなどを尋ねると、ほとんどどこにも行っていないことがわかる。小児保健の専門家もスタッフにすることを伝え、一般開放の日にもう一度来室することを勧める。

その週末親子で来室。母親と話をしているときにも、Bは膝からおりようとししない。保育者と話しているときにも、母親は、Bに遊具や絵本などを次々にみせ、細やかに世話を焼いている。Bが自分で周囲を探索する前に、新たな刺激が与えられる状態である。おむつ替えのために荷物から必要なものを出すときにも、保育者が「ちょっと抱いてみましょうか」と提案しても、Bを渡そうとししない。親子を観察していて、母親の側に不安が大きいことが感じられたので、中座した際に他のスタッフにも声をかけて、観察してもらう。母親より年上のベテラン保育者が家での様子などを詳しく聴取する。すると、家事の際にも抱っこやおんぶをして、離れることなく暮らしている様子が明らかになる。教育にも熱心で高価な玩具や、素材を与え、

「よい」刺激を与えたいと努力している。母親は、Bが鉗子分娩であったことを心配し、動くことができないのはそのせいではないかと言う。この日には、母親が育児を一生懸命していることに肯定感、共感を示し、母親が保育者に対して信頼感を持ってもらえるよう配慮した。さらに、いつでも相談に乗ること、一度医療施設を受診した方がよいことを伝えた。

#### 〈考察〉

母親がようやく問題意識を明確に示した。電話でのやりとりの中で、保育者が少しずつ母親との信頼関係を育てていたのである。いったん自己開示すると、堰を切ったように様々なことを話し始め、不安や心配も素直に口にすることができた。どのような環境であるかを探り、確信を持って理解し信頼した上での表現であるから、繕うことをしない。新たな環境にかかわるとき、保育者が受容的かつ暖かい雰囲気で存在することが、情緒の安定や信頼を育む。保育者の持つ雰囲気が、環境に対する信頼を強化するのである。これは、乳幼児のみならず保護者も同様である。

一方、保育者には、毎回電話相談のたびに関係が切れるのではないかという不安があった。また、かかわるべき適時性というものを逃しているのではないか、子どもにとって「今」何らかの手を打つべき時期なのではないか、などの迷いもあった。何故、無理に聞き出そうとしなかったのか。保育者の「勘」として処理されがちであるが、「勘」に裏打ちされたものは何かを考察しなければ保育の質の向上は望めない。母親の話す内容、口ぶり、声の調子などから、徐々に保育者に対する信頼感、安心感を持ってくれたことを感じた。保育者の「待つ」姿勢が新たな行動を生起した（心配事を告白すること）のである。待つ、見守るという援助も「いつ」「どのくらいの間」そうするかを吟味しなければならないことを示している。

#### 事例 2 - 4

その後、1週間に一度、一般開放日に来室。母親の不安が大きいのであえて親子を離すようなプログラムには誘わず、親子遊びなど親子共々楽しみ、刺激になるようなプログラムの参加を促す。少しずつ「やってみようか」という気持ちが母親に出てくる。また、母親が保育者に対して気持ちを開くと共に、Bへ保育者がかかわる機会も増え、語りかけに対してのBの反応、表情をみても、他の側面で問題があるようには感じられなかった。母親には一緒に遊びながら、少しずつB自身が自分の意志を表現したり、自分で行動を起こす必要感を持てるような環境をつくるのが大切であることを具体的に知らせていった。例えば、Bにとって腹這いになること、一人で何かして遊ぶことは運動技能の発達には必要不可欠であること、また、Bが泣いたからすぐに対応するだけでなく、しばらくBの様子をみて何をしたいのか観察することもよいなどと、知識の豊富な母親であったので、論理的かつ専門的に説明した。また実際にBを腹這いにさせ、一緒に見守りながら話をしたり、保育者がBに刺激を与え、身体を動かせるようなかわりをやってみせる。

3週間ほど来室がなく心配していると、母親から電話。家でも、床で過ごす時間を増やしたところ、玩具に手を伸ばしたり、横向きになるようになったとのこと。もうすぐ動き出しそうだという明るい声で話す。その後の来室で、保育者にもBが腹這いになったときに上体を高く上げることが増えてきた、足先や肘を使って少しずつ身体を動かす仕草がみられるなど、Bの成長ぶりが具体的に観察できた。Bは週1度ずつ母親と来室しながら、徐々に移動技能を獲得し、1歳3ヶ月には一人歩きできるようになった。

#### 〈考察〉

Bは十分に「自己への信頼」を育てていなかったと考えられる。母親との距離が近すぎるため、未分化の状態が長く続き、自ら行動を起こす必要性を感じることなく過ごしていたものと思われる。いつも先回りして与えられるため、「快」「不快」の両方の感情を経験することなく、自分の欲求すら不明確な状態であったのだろう。自ら環境に働きかけるための動機付けが低い状態である。このことから、情報過多の環境では、乳幼児が適切な経験ができないことがわかる。Bの状態を客観的に把握することで、母親が適切な環境をつくり、かかわることができるようになった。その結果、Bに変化が現れたのである。

この事例は、情緒が安定して過ごせるようになった乳幼児には、環境構成に別な視点が必要になることを示している。「何を育てたいのか」という視点である。保育においてはねらいにあたる。本事例では具体的には「運動能力を育てたい」というねらいのもと、Bが一人で過ごす場、時間を保障する、Bのそばに刺激となるような玩具をちょっとがんばって動けば手が届く距離に置く、Bが助けを求めても、すぐに要求に応えることは控え、自分の気持ちを表現する力や、自分で何とかしようとする行動する力を伸ばすなどの配慮をしたのである。自分で「がんばった」という満足感と「できた」という成就感を経験させることで、Bの側からの環境へのかかわりを増やし、能力を発達させたのである。また、保育者が直接かかわるだけでなく、母親（養育者）と信頼関係を築きサポートすることで、母親の家庭における環境やかかわり方が変容し、間接的に乳児を指導することが可能であることを示している。

## V. まとめと今後の課題

今回は乳児の「自己への信頼」を育てるための環境構成について、実践事例を通して考察してきた。

乳児期は、主に養育する人への関係を強固にし、身の回りのひとやものに対しての信頼を育む大切な時期であることは言うまでもない。保育現場における乳児保育については、子ども同士のかかわりよりも、保育者との関係を密にし、保育者との生活や遊びを軸に乳児の「自己への信頼」を育てていく必要がある。大人（保育者）と乳児に密接な関係を育む努力が欠かせな

いが、保育者と乳児の人数の関係、保育時間や保育者のシフトの関係で、保育者が十分に一人の乳児とかかわることができないことも多い。乳児の情緒の安定を築くだけでなく、環境に対しての興味、関心を育てていくために保育者とかかわりを十分に経験できるよう、また、時間、空間、ものの設定などへも配慮し、乳児自らが行動を起こせるような環境構成を行う必要がある。具体的には、

- ・ 保育者は乳児と一対一で、視線を合わせながら笑顔でかかわる、話しかける、身体への刺激を与えるなど、保育の中で必ず行う。
- ・ 一対一で過ごす時間を一定時間保障する。
- ・ 乳児が一人で機嫌良くしているときには、乳児の身体発達を考慮しながら、遊具や玩具などの刺激を与える。
- ・ 乳児の視界に配慮し、「見える」「聞こえる」ものの配置を行う、など物理的環境も検討する。

また、乳児保育では幼児以上に、家庭との連携が重要である。乳児の発育、発達の状態をきめ細かく把握すると共に、家庭での育児環境や、養育者とかかわりの実態をつかみ、乳児にかかわる大人が協力して育てていく環境づくりをしなければならない。そのためには、保育者は乳児とのみならずその保護者との信頼関係を構築する必要がある。乳児の情緒の安定を図るために、家庭と保育施設とのギャップをできるだけ小さくする努力をすると共に、乳児の「自己への信頼」を育む、新奇性や満足感の持てる環境を用意しなければならない。

乳児保育の環境は、生活が中心となる上、ともすると単純になりがちである。しかし乳児の認識する力、環境へ働きかけようとする力を育てることは、移動行動の獲得、探索行動の誘発に欠かせない。今後も、「自己への信頼」獲得過程に目を向け、保育者の保育環境構成のあり方を分析していきたい。

(注)

- (1) 幼稚園教育要領
- (2) 保育所保育指針